

Title	鈴木桃野とその親戚及び師友(下)
Sub Title	
Author	森, 潤三郎(Mori, Junzaburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.1 (1933. 4) ,p.33- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0033">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0033</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 鈴木桃野とその親戚及び師友 (下)

森 潤 三 郎

次に反古の裏書に出てゐる師友の名を擧げて、不明の分は前出のと共に識者の示教を煩はしたいと思ふ。

卷二水練の條に高橋太郎左衛門師の話が擧げてあるのは、水泳の師匠であらう。

卷三に狐にばかされた話二條を擧げて

此ふたくだりは吾師一谷先生の聞傳へ玉へることを、みづからかひ付置玉ひて、余が反古のうら書の内へ入れてよとて、おくり玉へるなり、今先生世を去り玉ひて已に一年を経ぬ、此卷をつゞるによりて、卷の初めにかむらして、いひおくり玉へることにそむかざるにぞありける。嘉永三年暮春

とあつて、稿本第五冊の卷頭になつてゐる。同じ冊に「うなぎ」と題する一話があつて

予が師内山先生は、きわめて心すぐなる人なりけり、又ものごとくに極てつたなきことおゝかりけりの書き出しで、人から大鰻を貰つて、親子二人がゝりで持て餘し、大騒ぎを演じた事が載せてある。内

山先生の壺太郎たる事はいふまでも無い。壺太郎は天保四年八月二十六日歿し、法號を常德靈明信士といふ。視聽草續篇七集の九、夢蕉拔萃の中に「内山氏謙太郎、名謙、字德柄、號一谷、小太郎子」とある、吾師一谷先生はこの人で、暉齋先生と同一人であらう。暉齋の話は水練の條にも引かれてゐる。別に飯尾一谷といふものが居ることは、無何有郷の「力員」と題する條に「一谷飯尾君と水稻荷毘沙門山上り」向陵が堂の扉に自作の詩を書したのを見た事が載せてある。桃野と詩社を結ぶ條にあるのは「一谷は師傅なし」とあるから、淳時、明時、謙と三代傳へて、先生と稱せられてゐる内山一谷には相應しくないから、友人の飯尾一谷であらうと思ふ。

卷四に鎗の師篠山吉之助がある。注に「此人なさけぶかき人にて、いろ／＼奇行あり、予も思になりたり」と記してゐる、わたくしは町道場の師範であらうと思つてゐたが、森君から甲子夜話に篠山吉之助の名が見えてゐると注意されたので、同書を見ると卷十六に

文通に云ふ、今朝篠山吉之助

兩番士高  
五百石

時氣訪問とて入來、四方山物語の次手、その祖父の咄しけるが、祖父は甚太

郎と云て、その妻は越智與右衛門娘にて、元祖松平右近將監清武の妹なれば、文廟の御時番士たりしが、御由緒を以寄合とせられける、夫より仕進の志無りしかば、人々疑訝りていかゞのことやと聞くに、今より後立身せば妻の陰もて進みたるになれば、願はざることなりとて、生涯寄合にて終れり、一年火に値ひ家宅灰燼となりしかば、聊なる小屋掛して假住居するを清武も氣の毒に思ひ、工匠をして相應の家宅を仕組ませ、既に持送らんとするを、甚太郎聞て堅く斷り、火災に逢たりとて、妻の力にて家補理せんこと不本意千萬の事也、小身ながら吾が力にて家は

作るべしと云て龜末なる家作したり、暫して門など傾き扉急に開きかぬる程なれどもその儘なり、一日清武訪來りしに門扉開かず、清武の僕從等門内に入り扉を開けども、扉の下土につきて明かざりしかば、歎もて地をほり、やうく開たりとぞ、夫ほどのことなるに甚太郎は自若として少しも恥る色なかりしなり、父は吉之助と云て、是も寄合にてありしが、御役出を願ひけるに、三代目右近將監武元武の一旦御役を蒙れば、其跡は御番筋になることなれば、無用たるべしとひたもの留たるに、小身の寄合は乞食にも劣りたる者なるとて聞入れず、齡五十を踰て御徒頭となり、後御先手頭に進む、其頃は舉世華侈の風俗なりしに、衣服などの盛薄なるは類もなき斗にて、家宅に障壁損壞すれども補はず、客に出せる烟茶の具等も見苦しきことにて、常服は縞の木布より外の物を用たることなし、時の人笑て笹山けちの助と呼けり、此人少年の時より武技は精絶なりしが、都下に師を立て標榜せる鎗劍の場へ行て勝負を申込しに、三十軒を試しが、負たること無かりしとなり、朋友より御旗本衆の舉動にはあまり輕々しければ無用たるべしと云しに、いやとよ我負たる人あらば、夫を師として今一稽古する心得なりと云へり、花柳演劇の地へも折々連行せしを人の嘲りければ、吉之助云やう、世人倡游演戲を好めば、平生座臥までその心離れず、夫にては大に人の害となるべきなり、我は不然、郭に入れば游冶の心なり、郭門を出れば元の武士の心になる、木戸より内と木戸より外と心持替るも是と同じと、因て游里の歸曉方になるときは、夫より直に寒稽古に赴しとなり、讀書をも嗜み、多の典籍自筆にて寫せしもの過半なり、并橋火事にて燒失せしとそ且天文を好みて頗る通曉なりしかば、その事に因て一橋殿今の一位亞相公より人をして尋られしことなどあり、魚鳥など贈られしこともありしが、書札の人に謝書の答する迄にて一度も御屋形へ踵謝せしこと無しとなり、年老し後吉之助と云名は若輩らしき唱なり、名を替へ玉へと云し人有しとき、我は左は不存候、凡人は何事も年より若きがよかるべし、自分より老たる心になると段々用に立ぬやうになる者なり、若き心持にてあれば、夫丈けの働は出来る者、されば名も若きがよく候と申し、寛政の初

に樂翁首輔たりしとき、齡七十に餘るが招て對面あり、鏗鏘たる容貌なりければ、微々と多事の場も勤るべきやと諷せられしを、最早年老候へば中々文官は勤り不申候たゞ武官にて此身を終へ候こそ本意に候と申けるが、いく程なく新番頭に陞還せられしと云、今此時を距こと殆三十年、はや如此の人も世に見へず、人材は次第に陵遲するものと嘆息の餘り、聞しまゝを録して進す、冊中に加へ給へ、八月廿一日林衡。

とある。述齋が話を聞書して松浦靜山に贈つたのを、その儘に收めたのである。寛政重修諸家譜卷第五十、清和源氏義家流、松平清武譜の前書に、

右近將監清武、實は清楊院殿第二の御子にして、文昭院殿御同母の御弟なり。はじめ故ありて越智と稱す。文昭院殿西城にいらせたまひしのうち松平の御稱號をゆるされ、越智をあらためて源氏となる

とある。清楊院殿は甲府宰相綱重で、文昭院殿即ち六代將軍家宣の父である。越智は與右衛門喜清といひ、甲府宰相の臣である。清武初めその遺跡を繼ぎ、後上野國館林城主となり、五萬四千石を領した。三代右近將監武元延享三年五月十五日奏者番兼寺社奉行より西丸老中となり、四年七月二十一日老中に進み、從四位下侍從に至り、加増されて六萬千石を領した。甲子夜話の記事を見て篠山氏の旗下たるを知り、諸家譜に當つて見ると、卷第千百四十六の最初に

伴 氏

篠 山

景助 藏人

資家 理兵衛 今の呈譜に景春に作る

資友 理兵衛 今の呈譜初資友後資盛また資後に作る

資良 理兵衛 資門 甚右衛門

具晴

甚太郎

延寶四年六月五日はじめて嚴有院殿にまみえたてまつる時七歳に元祿四年十二月二日御小性組の番士に列し、十六年七月二十二日家を繼、五百石を知行し、弟傳五郎資容に三百八十石の地をわかちあたふ。寶永二年正月妻の御ゆかりあるによりて寄合になされ、其番をゆるさる。元文五年八月二十一日死す年七十一、法名惠觀、牛込の圓福寺に葬る、のち葬地とす。妻は甲府の家臣越智與右衛門喜清が女

光官

吉之助 母は喜清が女

元文五年十一月二日遺跡を繼、寄合に列し、十二月十一日はじめて有徳院殿に拜謁し、明和六年十一月二十四日御徒の頭となり、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。安永二年七月二十四日西城の御目付に轉じ、四年八月五日西城御先弓の頭にうつり、八年四月十六日より本城に勤仕す。天明元年五月二十六日西城に復し、六年閏十月二十日よりまた本城に候す。七年十月十二日新番の頭にすゝみ、寛政二年七月二十二日死す、年七十五、法名貫通。妻は鶴殿藤助長證が女、後妻は黒川左門盛章が女、また本多作左衛門成興が女を娶る。

鈴木桃野とその親戚及び師友(下) (森)

資朋

熊三郎、實は坂本養安資直が二男、母は某氏、光官が養子となる。

天明七年四月六日はじめて將軍家に拜謁し、寛政二年十月九日遺跡を繼時に二十五歳采地五百石  
二十七日御書院の番士に列す。妻は京極鍊之丞高丘が女。 四年十一月

とあり、これを林述齋の聞書と比べて見て、述齋に話した吉之助は資朋であつて、熊三郎が後に父の通稱を襲つた事が知られ、桃野の鎗術の師もこの人であることが分る。事實文編四十に寛政二年八月資朋の書いた養父光官の墓碣銘が收められ、その一節に

先府君生而岐嶷、弱冠篤好武藝、得其師之許可者、山鹿之兵法、一刀之劍術、澁川之拳法、道雪之射、信直之御、大島之鎗也、而特妙使鎗、蓋甲于海内、從學者至八百二十八人、既學曆算於千葉氏、悉傳中根氏之蘊奧、(中略)在官謹嚴、無一蹉跌、其居家也、優柔寬厚、人不見其喜愠之色、然接門人、遇子弟、事々循踏規矩、

とある。資朋の鎗術も養父の最得意としたものを傳授されたのであらう。資朋は文政八年五月十八日歿したが、年六十、法號を得還院常暘日晃居士といふ。その墓の事は猶後に書かうと思ふ。

親族に就いては、卷一に「予が叔父醉雪老人」、予が祖父向陵翁」、卷四に「予が從弟多賀谷緩助」があるが、皆既に説明して置いた。卷一の廿騎町の怪異の條に「予が曾祖父内海彦右衛門」、予が大叔父内海五郎左衛門」がある。何れも母方の縁者で、五郎左衛門は親類書の五左衛門を正しとすべきである。

卷一に「予舎弟と俱に」、「予が弟中西まだ家にありし時」とあるのは、中西氏に養子に行つた八之助の事である。卷四に「予の縁者遠山霞堂」とあるのは、妻の父遠山繁十郎か、その子であらう。猶卷一、尾崎狐の條に

鎗術師範伊能一雲齋は予が先婦の叔父なりけり、築土下に住す、門人もあまたもてり

とある。これに據ると、桃野には遠山氏の嫁する前に先妻があつたらしい。その後の關係はどうなつてゐるか分らぬが、親族の最後に入れて置く。一雲齋名は由虎、祖父宗右衛門由常寶藏院流の鎗術に達し、多くの門人を養成し、父宗右衛門由舊を歴て由虎に至つた。この尾崎狐の條にある狂氣した門人を捕へた話は、依田學海の譚海に載せられ、大日本人名辭書には引用書を譚海として收めてあるが、その末尾に譚海には無いことが書加へてある。

又一節切の笛を一思庵に學び一雲と號す又無孔笛翁と云ふ八十餘歳の時一子を擧ぐ矢柄と名づく其の十七歳の時一雲歿すと云ふ矢柄亦槍法を以て林肥後守に仕ふ。

これによると九十餘歳で歿したらしいが、本郷追分町願行寺に祖父からの墓石があつて、由常には由舊の撰文、由舊には由虎の撰文を刻してあるが、由虎のには正面に「伊能一雲齋墓」、右側に「嘉永七年甲寅三月五日卒行年七十八」、左側に「一乘院雲譽齋念居士」と刻してあるのみで、僅に由舊の碑文によつて母の稻村氏なる事、同胞が三男三女あつて由虎の仲子なる事、安永六年に生れた事が知られる。その



歿したのは墓石にある通り七十八歳を正とすべきで、一節切の一雲は別人であらう。

復古の裏書に出てゐる友人にも不明の人が多いが、先づ次々に書上げて置いて、自述に見えたのと共に、示教を得て明にして行きたい。卷一に

齋藤朴園(幽靈の條)

書弟子石川乘溪(宮人天より降るの條)

乘溪は向陵門下で、桃野の相弟子である。

植木玉厓(狐狸字を知る條)

玉厓の事は前に記した。

大橋一九郎御徒の頭今御徒目付

小野竹崖(尾崎狐第二及び賊心の條)

竹崖の事も前に書いた。

米倉丹後守藩に何の彌平太といへる者あり、予がしれる福田藤治兵衛が弟なり(劍術の條)

予が友一峰子は其さが滑稽にして、又わざおぎの眞似にすぐれたり、繪事は雲峯老人に久しく従ひて、又ざれ繪に長ぜり。(賊の條)

雲峯は父成恭と同庚の大岡雲峯で、峰の字は師から授けられたものであらう。

予がしれる御作事下奉行豊藤省吾といへる人の弟何某(竊の條)

豊藤省吾は弘化五年武鑑御天守番之頭に

壹番ら二ばん丁 豊藤省吾

嘉永五年武鑑西丸切手御門番之頭に

二百三十八表 豊藤省吾  
表二はん丁

とあるを見出したが、その後何役まで出身したか分らぬ。

伊勢平八といへる人は伊勢貞丈が別家なり云々、其弟松軒子は予が友なり(瘡瘡の條)

伊勢平八は寛政重修諸家譜卷第五百二、平氏季衡流に見ゆる角之助貞一で、家督後家の通稱平八郎と改めたもの、弟松軒は政吉貞友で、環翠堂の同門松軒はこの人であらうと思ふ。その菩提所谷中大雄寺に照會して見たが、遂に返事をしてくれぬ。

予が友櫻園鈴木分左衛門(奇病の條)

白藤の友人で南畝門の幽谷と同人である。卷二に

予が友北雅君は、よく浮世繪をかき給ひて、おしえ子も多く侍りける、其中に栗園といふ人ありけり(栗園の條)

この話は香亭雅談卷下にも引いてあつて、北雅の姓を山寺とし、「北雅素學畫北齋、栗園其弟子也」と記してある。寛政重修諸家譜卷第六十二、清和源氏義光流、武田支流に山寺氏が二家あつて、一は采地三百九十石餘、一は廩米三百俵である。桃野が敬語を用ひてゐる處から、この家かも知れぬと思つて、

鈴木桃野とその親戚及び師友(下) (森)

(四二)

四一

市ヶ谷から市外杉並町高圓寺に移つた宗泰院を尋ねて見た。墓は合葬になつてゐるので、過去帳を出して貰ひ、北雅の二字が法號にあつたら仕合せと思つて調べて見たが、天保八、同十五、安政二、同三年に山寺氏があるけれども、何れがそれとも見當が付かないので、その儘引き下がつた。若し通稱が分つたらば、直に知れやうと思ふ。

阿部松陰此談をなしたり(貴様の條)

この人の事は前に書いた。

月笛話(愚人の條)

川上鱗川話に坂千里などにも聞けり(水練の條)

鱗川は前の氷雪社同人であらう。

坂千里は千坂廉齋で、名は畿、字は千里、通稱は一學、本姓は吉田氏である。日本教育史資料に引く

處の昌平坂學問所御書付留文化五辰年ヨリ  
文政六未年マデに

文化十四年正月廿五日駿河守殿○若年寄  
植村家長え進達書面四通留○他三  
通略之

大島雲四郎組御徒乙骨半右衛門厄介

吉 田 一 學 酉歲  
廿六

右文化四卯年より寄宿稽古仕罷在者に御座候業も相應に取廻し外稽古人には右程の者無御座候何卒學問所出役被仰付先例の通手當五人扶持被下置候様奉願候例書相添奉入御覽候以上

酉正月

林 大學頭  
筑 紫 右 近  
古 賀 彌 助  
依 田 惠 三 郎

儒職歷任錄に

吉 田 一 學

文化十酉年二月八日出役被仰付五人扶持被下文政三辰年十二月十二日江目姓養子ニ成西丸御徒窪田主水組え御抱入ニ相成、是迄之通出役、五年年八月十六日願之通江目同家千坂苗字相名乘、天保七申年九月七日表火之番

天保八年致仕して莞翁と號し、元治元年八月七十八歳で歿して、四谷東長寺に葬られた。天保壬寅夏

校正の廣益諸家人名錄第二編に

儒道學 廉 齋 名畿字千里

本所辨天小路 千 坂 一 學

とあるので住所も知られる。松崎慊堂の日記慊堂日曆に二三箇所その名が見え、天保五年十二月九日の條に

千 坂 一 學

昌平坂御徒出役、名畿、字千里、公儀衆引立役之由

と記してある。栗本鋤雲の匏菴遺稿、漫錄追抄の「幕府の文臣」中に、松崎柳浪、乙骨耐軒、木村裕堂等

鈴木桃野とその親戚及び師友(下) (森)

(四三)

四三

學問所教官の異材は皆千里の門より出たとあるから、その教授方の巧妙であつた事が思はれる。嘉永年間に書いた岡本況齋の相識人物志には

好人物なれど和漢の學はいまだ歸宿をしらず

と評してある。廉齋の書留めた隨筆は數種帝國圖書館、史料編纂所等に寫本で傳はり、廉齋閑話と題した一冊が日本藝林叢書第五卷に收めて刊行された。

富永金四郎といふ人の話又秋浪もかくありしとか(同し條)

この秋浪は氷雪社同人であらう。

雲樓(手打の條)

無何有郷に雲樓が死んで、桃野がその兩刀を買求めた事及びその所藏幅の目錄が見える。卷三に

余がしれる佐々竹氏(砲術の條)

弘化三年の武鑑天守番之頭に佐々竹三四五郎といふ名が見える、或は同人であらう。卷四に

一場孫助 桃野が「孫助は野村篁園社中にて詩人にてぞ有ける、日下部梅堂、岡田昌碩と社を結び詩を作る二人の

もの皆及ばざるなり、篁園、霞舟毎にこれを賞し、各和詩ありけり、其詩篁園に彷彿して大に異氣あり、人物も

甚敦厚にて且滑稽あり、予は馬術の弟子のみならず、鎗術弓術皆同師なり、且孫助が幼なる時、予が乳を分ち與

へしかば、同胞兄弟の如く思ひけり○中手跡の見事なる事妙也、楷書は篁園に似たり、大坂に一年ある内、公家

の文字を學びたるが、さながらに古代様なり、歌も其時より學びたり○中孫助名は養、字は直、雲湖と號す○雲湖居

士の條その尾に嘉永庚戌  
六月晦日しるすとあり

### 同卷に竹村海藏と題して

竹村海藏は向陵翁が取立ての弟子なりけり、後に林門となり大才の聞へありけり、書もよく書きて出藍と稱しけり云々として長い記事がある。海藏名は正信一名は蕘、字は伯實、悔齋と號す。三河舉母藩主内藤山城守政成に仕へたが、藩老津村伊左衛門權を專にして政を亂す、悔齋上書してその陰事數十條を擧げて彈劾したが、言行はれざるを以て去つた。文政三年正月十五日醉ふて歸り、途津村に遭ふて之を斬り、友人で麴町に住する眼科醫鈴木一貫の宅に至つて後圖を問ふ。一貫曰く官に告げて罪を待つを上策とし、家に歸りて自刃するを中策とし、逃匿するを下策とすと。悔齋曰く上策は死を惜むに似て、下策は鄙なりと。酒を請ふて痛飲し、子的之函及び津村の遺子に與ふる書を作り、且つ蘭竹二三紙を畫き、家に還つて自殺した、年三十六、麻布日ヶ窪清徳寺に葬り、法號を常説院法教日化信士といふた。大正元年清徳寺が府下へ移轉のため、隣寺長耀寺に改葬し、累代の墓石と共に現存してゐる。桃野の記事の末に

詩集一卷あり、後林祭酒櫻字予同僚櫻墩をして校正せしむ、石柳溪偶來りて其勞をたすけけり、其警策ありとてたへてけり。

とある。森君は日本及日本人昭和四年第一六八號以下六號に涉つて「奇士竹村悔齋」を連載され、鈴木一貫の事は別に中外醫事新報同年第一一四四號に記された。此處に關係者の姓名を記するを得たのは同君

の賜ものである。

榿宇は第九世の大學頭、名は焄、字は用韜、榿宇又培齋と號す。述齋大内記衡の第三子、寛政五年五月生る。長男、次男が夭した爲に嗣となり、文化五年三月家齊將軍に謁見し、文政二年二月部屋住から學問所に出仕し、十二月布衣を着する事を許され、十二年十二月從五位下左近將監に敘任、天保九年十一月大學頭と改め、十一年正月小姓組番頭次席に進んだのが未だ家督相續以前で、特に異數と稱された。十二月朝鮮入聘の事を管し、十二年十月家督を繼ぎ、十四年四月將軍日光社參に扈從し、弘化三年十二月二日卒す年五十四、諡して恭恪と號した。

悔齋の詩集を校正した櫻墩は小花和氏、名は正度

○武鑑に據る

字は君璋、銚次郎また正助と稱す。櫻墩はそ

の號、一に玉舟とも號した。天保四年學問所の試に乙科に及第し、十三年十一月十三日教授方出役を命ぜせられ、安政五年正月二十二日徒頭に轉じて兵部と改め、十一月二十三日布衣を着する事を許され、文久元年十一月二十二日光奉行に進み、十二月十六日從五位下内膳正に敘任し、廩米を改めて采地三百石を知行し、二年五月二十二日先手鐵砲頭に遷つたが、同年十二月二十日職を免せられ、次で致仕し、明治十年十二月四日歿す、年六十五、法號を覺正院殿櫻墩日映居士といひ、日暮里善性寺に葬られた。

その白藤、松陰と通鑑の會讀をした事は前に書いた。櫻墩の手稿、鈔本類が本箱に二つ向嶋の榎本子爵家に保管されてゐたが、明治四十三年大洪水の際に庫中に水が入り、その退くのが遅かつた爲に、書物の

被害甚しく、小花和本は葉々糊つけした如くになつて、水で洗つて風入をしたけれども、汚浸腐蝕のため内容を知る事が出来なくなつたさうである。以上官歴は儒職歴任録、續徳川實紀、武鑑に據り、歿年月日、享年と書籍の事は故平山男爵の示教で知つた。

悔齋の詩集は奚所須窩遺稿と題し、美濃紙版一冊、内題は卷上を奚所須窩小稿といひ、紙十五枚、卷下を同續稿といひ、紙數十六枚、匡郭縦六寸、横四寸三分、每半版十行、行二十字、四周單邊、木製活字を以て印刻せられ、天保十二年花朝後一日樗宇林題、天保壬寅歲五月友人安積信拜撰の二序と、朝鮮通信書記李明五、太常小正李顯相の序とが冠してある。本書は印刷部數も少なかつたものと見え、圖書館の目錄にも著録されたのを知らぬが、幸に森君所藏のものを借覽する事が出来た。

櫻墩の勞を助けた石柳溪は、前に書いた石川則正である。

友人庸臺子書畫ともによくせり、學問もよくし、詩を作るに警拔ありけり(舞を好む事の條)とあるがこの人の事はまだ分らぬ。

予が僚友蓼灣といへる人は、古今に越たる才子なりけり、殊に詩をよくし、千古未發の見解ありて、本邦詩學ありてよりの宗社といふべし、書も亦絶倫なり。

蓼灣は久貝氏、名は正岱、字は宗之、初め金八郎と稱し、後傳太と改む。采地九百石を知行し、書院番組頭を勤めた又三郎正陳の長子である。文政元年に生れ、天保九年學問所の試に乙科に登第し、十三年



十一月十三日教方出役を命せられ、十人扶持を賜ひ、弘化二年十一月四日家督を相續し、嘉永四年三月二日書院番士となり、次で御系圖調出役を命せられ、文久元年九月十五日年來の出精を賞せられて金一枚を賜ひ、十一月二十日日光山に納める系圖の清書を勤めたので銀二枚を賜はつたが、實は同年七月二十三日に四十四歳で歿したので、宿谷空空と同じ淺草北清嶋町白泉寺に葬られ、同寺が巢嶋町庚申塚に移轉の際、その墓も幸に移されて現存してゐる。法號の卽心院殿普山良門大居士であること、歿年月日、享年は住職來馬祖道師の厚意により、過去帳から寫し送られた、此處に深謝の意を表して置く。平山男爵の出して居られた雜誌江戸に耐蓼遺珠と題して、中村敬宇の乙骨耐軒、久貝蓼灣二先生傳、耐軒の日本刀歌、甲役途中詩、蓼灣の蓼灣詩鈔が連載せられた事がある。霞舟の編した熙朝詩蒼續編第四集にもその詩が收められてゐる。

偶渡邊金造氏が蓼灣から桃野に宛てた書簡を藏せられてゐるのを、森君から借用したから此處に載せる。

動止益御清佳奉賀候扱先日は御藏書拜借難有奉存候後卷御取よせニ相成候はゞ一二本此者へ拜借願度候右之段相伺度何れ其内參拜餘縷可申盡候不具

七月四日

岱 再拜

桃野 詞宗

巻き納めには

鈴木孫兵衛様

久貝金八郎

として、状袋には

鈴木孫兵衛様

久貝傳太

と記してある。

桃野の門人は、鈴木家所藏反古の裏書稿本の用紙(出席簿)のみでも數十人擧げられるが、此處には裏書本文の内から一二を掲げて置く、その経歴は概して不明である。卷一、尾崎狐の條に

門人興津生

とあつて、與力彌八郎の子で鉉一郎と稱したことが知られる。卷二、賊の條に

門人須藤三次

があり、卷四、雲湖居士の條に

予が門人御小納戸川口乙三郎君

が見える。諸御役人代々記の御小納戸の部に、天保十三年十月二十五日の下に、新番頭格小姓頭取志摩守嫡孫承祖川口乙三郎とある。愼徳院殿御實紀卷六には二十四日の條に、石河利三郎、太田勝次郎、大久保半五郎、貴志鐵之丞の四人が小納戸になるとあつて、川口乙三郎は見えぬが、二十九日布衣を着す

鈴木桃野とその親戚及び師友(下)(森)

(四九)

四九

る事を許さるゝ者二十八人の中、小納戸石河利三郎、大久保半五郎、貴志鐵之亟、川口乙三郎、太田勝次郎とあるから、二十五日に任せられたのが漏れたのである。代々記には弘化二年三月死と記入してある。この人の事は、後に書くこととする。

次に桃野の遺文に就いて、見聞する處を記して置きたい。著述で見る事を得たのは復古の裏書、無何有郷、醉桃菴襍筆、桃野隨筆の四種である。復古の裏書は國書刊行會の刊本があるから、詳しく述べるにも及ばぬが、他の三部は寫本であるから、此處に目錄を擧げやう。無何有郷は

上 卷

一書評 一劇評 一浮世繪評 一華人書 一丸藥丸締法 一狗說 一刀說 一朱肉粘り 一餓李

中 卷

一書論 一印油黃檗 一木母 一糸脈と陰陽 一雲樓書幅目

下 卷

一自述 一狐妖 一力員 一球人詩 一柳川重信 一大田白蓮 一夢 一厄穢 一畫の工夫  
一大鳥 一薙髮 一唐寅畫

に就いて記し、醉桃菴襍筆は

上 卷

一傘 一陰石 一小普請組 一杉田の遊

一間違ひ 一隣人の話 一うたひ 一目利講 一梅陀 一狼煙

の各項に分ち、皆自己の關係した事、又は知友に關する話が蒐めてある。桃野隨筆は帝國圖書館所藏の金世隨筆と題する寫本一冊の後半部を占め、

- 一 韵語一則 二 禮記 三 杜詩一片花飛前聯 四 素讀吟味心得書 五 機警 六 道有道 七 兄弟他人始 八 隨筆序 九 卵油 十 雁瘡藥 十一 完楚 十二 簾 十三 醜罵 十四 神代のむかしより 十五 武士 十六 四書五經 十七 竹堂先生 十八 侗庵先生 十九 不二石庵 二十 脇差下ケ緒 廿一 客來 廿二 若人 廿三 高田大根 廿四 夏の日 廿五 白魚 廿六 侗庵文詩三條 廿七 選字 廿八 作詩文 廿九 物はあらまし 三十 恩義を忘るゝ事 三十一 狂人の事 三十二 博徒 三十三 大瓢 三十四 しほざいふぐの魚 三十五 筐工 三十六 あづき五合 三十七 射藝 三十八 瓢の説付大小瓢 三十九 煙草火 四十 錫德利 四十一 松脂 四十二 茶 四十三 燈油 四十四 澤庵漬 四十五 齒痛 四十六 土藏 四十七 桃囊(接き木) 四十八 芝藏 四十九 大解 五十 胎生魚

の五十條を集めてある。その他にも四書に類したものが數種あるらしい。香亭遺文の零碎雜筆一に載せてある

桃野の詩餘

左の一文は鈴木桃野が手記中に見えたるを節略したるものなり

水野越前守再勤したるとき林祭酒之を賀する詩あり滿幅の諛辭見るに堪へず世間文字の徒唾罵せざるなし、其の頃越州下屋敷千駄谷の莊中に靈是生ぜし由祝辭を乞ふとて篋張りの絹一帳づゝ處々に配り大學頭は一筆なるべし其の

鈴木桃野とその親戚及び師友(下)(森)

受け込みにて我が輩までも一張回されたり林家よりの御廻しとあれば御用同前にて辭すること能はず依つて一計を設けて誰にも知れぬやうに詩餘を作りて字面はよく本意は規戒を寓し其體面を失はざるやうにして林家まで遣はしたり

濱松侯園中芝草賦麥秀兩岐一闕爲頌

黃閣勤循職。靈草榮楷側。蓋金光。莖玉色。三秀呈奇特。延年應踐神仙域。孰知窮極。上帝淵嘿。皆個難窺測。蕙蒲生、賞莢植。昔聖加脩德。地祥天瑞無休息。子孫千億。

といふ話も、わたくしの見た書中には無い。因に記す、桃野から。「滿幅の諛辭見るに堪へず」と罵倒された、水野忠邦再勤の節林大學頭趨が呈した賀詩は左の如くである。

濱松侯再任首輔奉蕪詩以賀之

由來相業屬英資。物望除君復有誰。梁棟姿人應再仰。水魚□恩世是知。月逢冥蝕明何減。松歷嚴霜翠愈滋。聊□寸志酬厚眷。即今當頌却呈規。

辱愛大學頭稿

近時刊行された日本藝林叢書第五卷所收の昌平茗談には、桃野の談が載せられてゐる。

帝國圖書館に藏する先哲手簡二冊は、友野霞舟が蒐集した眞蹟貼込の巻物が、後に二條公爵の手に歸したのを謄寫したものであつて、その中に桃野の漢文序一篇と書簡一通が收めてあるのを左に引かうと思ふが、圖書館本は餘り上手な寫しでないから、誤字脱字無きを保し難い。

詩載鳥嚶易稱朋盍序天倫則居其一論損益 各有三齊國宰臣全善交於久敬孔門高足戒獨於離羣投膠漆而自堅入芝蘭而潛化故自天子至于庶人未有亦復友以輔其仁以成其德者也是以朱張把臂託妻子于生平韓孟忘形懷駑蚤于離別別多會少經一日如三秋水遠山長寄寸心於尺素然而蕭朱隙其末餘耳凶其終或忘勸善於斷金或責竭忠於如醴遂使風波起平地以至讐隙結同根故知能會此道者鮮矣霞舟先生有感于此知歡娛之易失慮聚散之難常歎今雨之寥々傷晨星之落々因觀其物爰想伊人追昔撫今亡多存少乃傾塵籠遍探蟬蠹叢試檢敗箋多得友朋應復十年魚雁莫非目斷魂銷數首詩歌皆是筆歌墨舞或言千里面或寄數行啼輯集裝潢不背半生交契展觀披閱堪消萬斛窮愁何勞魂夢相尋半途迷路不用黍鷄爲約千里結言若是則不啻對坐孤窗晤言一室焚香以告祖考作簿以記金蘭樂可言哉厚之至也世之得新遺舊就熟去涼者將以有愧于此卷也  
天保壬寅藤月  
桃華仙史紀成夔

とあつて、天保十三年その四十三歳の作である。書簡は

過日は御光臨之處草々奉謝候其節御囑之高作漫然塗抹仕候得共餘り醜惡恐入奉存候殊ニ此節執筆久々廢絶腕鬼猖獗筆不隨意候處勉強從事不堪羞然候御海容奉祈候余期面晤以上

四月廿六日

紀 夔 拜

霞舟先生 足下

とあつて、何年の事か知れぬが、霞舟が桃野を訪問して自作の詩か文かの揮毫を依頼したものである。

桃野が墓誌銘を書いた事が、反古の裏書に二箇所見えてゐる。即ち卷四雲湖居士の條に

鎗師篠山君は先に死して、恩師なれば墓銘を予に託し、近きあたりに墳墓あり。

篠山君は前に師の處に引いたやうに、旗下の土吉之助資朋である。昭和七年三月十四日東京帝國大學

鈴木桃野とその親戚及び師友(下) (森)

(五三)

五三

附屬圖書館に調査の事があつて出かけた節、圖らず舊南葵文庫から寄附せられた林舊竹編纂の墓個餘誌稿本十餘冊が司書官室に出してあつたのを見せて貰つた内に、牛込横寺町日蓮宗圓福寺にある篠山氏の墓圖を見出した。

篠山吉之輔

文政八乙酉年五月十八日没

總卯塔中央青自然石高四尺外一基在

として寫生圖があつて、中央上部に家紋(木瓜の下に二つ引)を刻し、その下に

文政八乙酉年

得還院常喝日晁居士

五月十八日

左端に「得圓院妙還日觀信女」、右端に「深遠院妙相日照大姉」の二法號が刻まれてゐる。得と還の二字が共通してゐるので、日觀信女が資朋の妻と思はれる。資朋は諸家譜の寛政二年二十五歳が正しいとすれば、文政八年六十歳で歿したことが知られる。墓碣餘誌には碑銘の事は何とも書いて無いから、その歸路圓福寺を尋ねやうと思つたが、若し移轉してゐたら無駄足になると考へて、歸宅後日本寺院總覽を見ると、寺院は原地に在るが、墳墓は悉く和田堀内に移したとある。四五日を経て堀の内へ出かけ、漸く墓地を探し當てたが、移轉の際自然石の分は廢棄され、他の一基笠附の分へ合葬の事を刻したのが

建てられてゐるのを見て、資朋撰養父光官の墓も無くなつたのを知つて失望した。墓碣餘誌にある自然石の裏面に碑文が刻せられてゐた事と思はれるが、文政八年とすれば桃野二十六歳の作である。

もう一つのは同じ所に

予が門人御小納戸川口乙三郎君語られたり此川口氏死して予墓銘をかきたり

とある。川口氏の事は門人の條に記したが、墓地は青山の玉窓寺にあつて、乙三郎より五代前の頼母信友は書物奉行を勸めて、明和八年歿した、その墓を尋ねに行つた時、既にこの系の墓碑が廢せられたのを知つてゐる。乙三郎の歿したのは弘化二年であるから、碑文を撰んだ桃野は四十六歳で、歿する八年前に當る。桃野の墓誌銘を書いたといふ墓の所在地は分つたが、二個とも廢滅したのは遺憾である。

斯の如く桃野が隨筆に記して置いた碑文は滅亡したが、別に三個の碑文を森君から教へられたのは嬉しい事である。昭和六年十二月森君が雜誌今昔第二卷第十二號に、牛込若松町寶祥寺墓地で桃野の書いた墓誌銘を見出したと書かれたから、わたくしは七年二月の末に漸く暇を得て往つて見た。それは文政十三年五月二十七日七十六歳で歿した幕府代官松下内匠堅徳の自然石の墓の背面に楷書を以て書かれてゐる。末尾に

不肖男松下權輔維則建

桃野鈴木成夔書

鈴木桃野とその親戚及び師友(下)(森)



とあつて、撰者の名が無いのは建設者維則の撰と思はれるが、或は桃野の撰したのかも知れない、兎に角桃野が三十一歳の筆である。

次で森君から三月四日附で駒込海藏寺に於て白藤生母内海氏の里方の墓域を見出し、内海氏の兄彦右衛門常富の墓に白藤の撰文を桃野が書いたのがある」と知らされた。九日本郷に用事があつたから、烈風ではあつたが海藏寺に廻つて見て來た。天保八年丁酉九月で、桃野三十八歳の筆である。

五月十一日又森君から赤坂報土寺に桃野の書いた藝州藩品川山樂の碑文があると知らされたので、二十四日の午後往つて見た。臺町報土寺には井部香山の墓が史蹟に標示されて居る。山樂の墓は本堂左側から裏手の墓地へ出て二側目の筋を右折し、四行目の角に南面して立ち。正面に「藝州品川山樂君墓」と題し、三面に姪の柴田典が撰んだ文を「江戸鈴木夔謹書」としてある。文政十二年七月であるから、桃野三十歳の筆で、発見された三個の中では、最も早く書かれたものである。

最後に桃野の子成虎につきて記して置きたい。成虎は五一と稱し、竹圃と號す。桃野の次男で、天保二年生れ、兄彦太郎成龍が歿した爲に嗣となつた。その官歴は曩に擧げた通りであつて、その他には何にも記すべき逸事等は傳はらぬ。光照寺の墓石と過去帳とに據れば、明治二十九年十二月十二日六十六歳で歿した。家藏に古賀茶溪の贈つた書簡一通があるから、此處に寫して見やう。不明の文字は推測を加へず、闕字にして置いた。

爾來者無申譯御疎濶申上候時下不調之處文候清廻奉抔賀候當表不相替不面白之事に承及仍□嘆息送日候尤近日ハ一圓□□不就蠶巢ヲ治メ居候間耳食之儀ハ甚乏敷少シハ幸之事と自咲仕候其御地御旅館ハ要衝之趣定而來□之核ヲ御受可被成奉拜察候前日ハ枯魚澤山惠貺老母深嗜之品日々相喫相樂有難仕合奉謝候別相變儀も無御座候へ共幸便起居拜候仕候餘ハ次鴻可奉觀縷候敬具

中秋後一日

二伸小生前月十一日□名□號茶溪と相改申候序ニ申上置候已上

とあつて、書簡には宛名も署名もなく、状袋に

鈴木五一様文几

古賀茶溪拜

とある。茶溪は侘庵と桃野の姉松子との間に生れた子謹一郎増であることは前に述べた。弘化四年三月二十八日儒者となり、安政二年八月三十日二丸留守居兼洋學所頭取となり、翌年正月十一日洋學所を蕃書調所と改稱、萬延元年十二月二十九日留守居番次席に進み、文久二年五月十五日留守居番兼昌平學事に轉じ、元治元年八月十三日大坂町奉行に任せられたが、病を以て辭し、慶應二年十二月二十九日製鐵所奉行並となり、三年三月朔日目付に轉じ、從五位下筑後守に敘任し、明治元年十月駿河に徙居し、朝廷徵すこと再度に及ぶも出でず、六年東京に出で、淺草向柳原に家を築き、十七年十月三十一日六十九歳で歿した。以上は吉田賢輔記する處の茶溪古賀先生行略に據つたが、茶溪を通稱に改めた年が分らぬ。その年が分れば、從つてこの書簡の年代も知られ、その改名の七月十一日なる事も知れる訣である。こ

れも古賀家の事蹟に通じた方の示教を請ひたい。

以上甚だ雑駁な記載であるが、桃野を中心として今日までに知られただけの事實を書いて見たのである。森銑三君はこの原稿を一覽して種々注意され、參考資料をも提供された。同君の注意が無かつたらば、これだけに纏める事も困難であつたと思ふ、此處に記してその厚意に深謝の意を表する。(昭和七、三〇、稿、同八、八、補訂。)